

【後半1から】

《コーディネーター M》

「T-over人権教育研究所・人権こども塾」のホームページを開いていただいたら、右上に「鳴門市人権地域フォーラム」という「コーナー」があります。そこを「クリック」してくれたら、2004年度からの「鳴門市人権地域フォーラム」のすべての記録がご覧いただけるようになっています。このすべての記録は、今語っていただいた鳥取の佐伯さんがまとめてくれています。感謝しかありません。

(笑顔で) Hさん、凄い人はいっぱいいるんです。すごい人といっぱい巡り合います。人権教育のよろこびは本当に出会いとつながりです。その関係性です。30年前にスタートした中学生の人権集会、その第1回目から参加していただいている香川県のK先生に語っていただきます。

《香川県三豊市人権塾あゆみ会代表 K》

(一言一言ゆっくりと) 香川県の西の方に、三豊市というところがあるんですが、そこから来ましたKと言います。私は今年の夏に実際にあった具体的な例を通して、部落差別を「わがこと」とするとよくいいますけども、それを実践するために、こういうことも「わがこと」にすることにつながるんだなあという話をさせてもらいたいと思います。

私たちは三豊市で、NPO法人「ピース」という会を立ち上げているんですが、その中に「人権塾あゆみ会」というのをつくっています。その「あゆみ会」が、毎年夏に主催をして、中学生の人権を語る交流集会、大人の交流集会を開いています。今年で4年目になります。

今年、中学生交流集会の意見発表者の中に、テーマが「部落差別をわがこととして考える」ということで意見発表した子がありました。これは、その発表した子が考えたテーマです。4月29日に、今年の交流集会を開催するために第1回の実行委員会を持ちました。

その実行委員会の時に、今日の冒頭に教育長さんが言われた「NHKラジオ深夜便」でM先生が語られたCDを送っていただいたので、31人集まつたみんなで、その実行委員会で聞きました。全部聞いたら50分くらいのCDですが、みんな熱心にきました。

その後、意見発表したい人の希望とどういうテーマで意見発表をするかということを聞いたところ、中学2年の女子が、部落差別について発表したいと言ったから私が、「今日聞いた、M先生の『ラジオ深夜便』のCDを貸そうか」と言ったら、その子は喜んで借りて帰ったんです。その次の実行委員会が6月8日になりました。その時に1回目の原稿をつくって発表をしました。それなりに文章はまとまっていました。けど、もう一つだなという感じがしたと私はその時に言つたんです。

8月17日が本番だったので、8月10日にリハーサルをしました。そのリハーサル意見発表の内容が、1回目の時よりぐっと良くなっているんです。一番すごかったのは、8月17日の本番当日に聞いた「部落差別をわがこととして考える」の意見発表でした。私の心をグサッととらえたんです。

(徐々に言葉に熱がこもる) 何かなあと考えていたら、理由ははつきりしていました。その子は、午後からの大人の交流集会へも出てくれるということで、昼ご飯と一緒に食べよつたんです。M先生のCDを何回も聞いたと言ったことが意見発表の中に出でたから、わざと多めにして「10回ぐらい聞いたのか」と私が尋ねたら、なんとそれ以上、具体的な回数を聞いたたら、15回聞いたと。50分です。そのCDを15回聞けますか？自分ごととするために、M先生が受けた部落差別のことを自分ごととするために15回聞いているんです。

なんでそれだけ聞けたのかというと、その子自身が「外見のことで周りの友だちからいろいろ言われて辛かった。叩かれたわけでもないけど痛い。傷つけられたわけでもないけど血が流れている。」と書いています。それと、M先生の小学校時代のことについて語られた事実。それから、大学時代に友だちとのやり取りの中で出てくる部落差別の事実。重ねるんです。

意見発表までに、より自分のことに対するためにCDを15回聞いた。それプラス、親にも部落差別のことを語ったそうです。するとその親が「そもそも部落というものはないんだ。けれども差別をする周りの人がつくった変な差別、それが部落差別だ。そんな差別は絶対にしてはいけない。」と言つたんです。

こんな見事なプラスの返しをできる親は、そんなにはいないと私は思いました。

でも、その子の親はそういうふうに子どもに返したんです。それがまた、この中学2年生の子の力になる。それを念頭に置いて何回も聞くうちにM先生の体験と自分の体験がしっかりと重なって、伝えたいことが彼女の中で固まつたんだと思います。私は一番心に沁みる発表でした。

同じことを繰り返し聞くというのも「わがこと」とする一つだなと思いました。その子は午後からの大人の会にも参加して、「私は来年も実行委員会をやります。高校に入つてもこの会に来ます。」というようなことを語ってくれました。

徳島の「人権を語り合う中学生交流集会」が30回でピリオドを打ちましたけど、私たちがやっているのは、まだ4回です。けど、そして細々とした積み重ねを通して、私は、徳島の中学生の存在や、今、前に座っている高校生の存在が羨ましいんです。本当に30回のうちにここまで行きたいなど、そういうことを常々意識しながら、香川県の三豊市で、そういう細々とした積み重ねを今後ともやっていきたいなと思っています。どうもありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター M》

ありがとうございます。人権教育は具体です。会場には、本当にたくさんの方が集まつてくれました。皆さんと、具体的な思いを出し合えたらと思います。いかがでしょうか。では、お願ひします。

《1996年度1中学校卒業生 T》

K町から來ました。Tと言います。少し時間をください。私にとって人権学習は生き方の追求だと学びを続けていくうちに思うようになったんです。(メモ用紙を手にしながら)ちょっとでも伝わるようにしたいので書いてきましたが、もう見ません。ちょっと見ていいかな。

(会場に明るい笑い)やっぱり人間にとつたら、夢とか差別ってやっぱりあると思うんです。それがやっぱり、良い学びや社会になって来れたけど、あると思います。けど、差別やいじめをまかり通らせてしまつてことで、「する側」「される側」関係なく、みんなの可能性をむしばまれていると、私は思うようになりました。

私にとっての人権学習は、生き方の追求なんです。いろいろ言いたいことはあつたんですが、今日も、日の出から12時くらいまで畠におりました。灼熱の中にいて芋を掘つて、シャワーを浴びてここに來ました。私は44歳になります。

「みんなで語り合う人権学習」を中学の時に学ばせてもらって、自分にしかない人生の歩みをしたいと、どこかで思うようになったんです。私にしかできない生き方をしたいなど。これが私にとっての…。部落差別やいろんなことに自分と向き合つて答えの出ないような時もあつたんです。

(イキイキと身振り手振りしながら)今日も芋掘りしながら自問自闘したりしながら、芋を掘つて掘つてながらここに來たんです。ずっと考えていて、やっぱり、少なくとも44歳になる自分なりにやつて來れたような気がしました。自分の人生どこで悪くなるかわからんですが、私なりの生き方ができたんじゃないかななど、一瞬自分を褒めました。悪いところはいっぱいあって、変えていくためにね。

この場で立たせてもらつて、多分、自慢してしまうと思うんです。(ナイロン袋に入った鳴門金時を持ち上げながら)これは、今日掘つて來た芋です。これ美味しいでしょう。これで20年以上農業を続けてきました。母の故郷で。

こうしてニコニコしながら4人目で話ができるおじさんがいるということが、これは、僕の両親、妻の両親、いろいろ思つて考えることもあるんですけど、どういう志や思いを持って生きて來た人が、僕のご先祖さんや周りにいたのかなと思うんです。

僕のじいちゃんばあちゃん、妻ともお互いのひいじいちゃんひいばあちゃん。本当にこの学習に出会わせてもらつて感謝しかなゐんです。じいちゃん、ばあちゃん、ひいじいちゃんひいばあちゃん。誰か知らんけど、差別に対して屈してしまう人がいたかもわからん。

(身体中で、弾むように表現しながら)でも、さつきのY先生の平行線の話ではないけど、切磋琢磨して、いっぱい働いてくれて、今の私がいるんです。これは、差別に対してどういう思いだったかはわかりません。でも、少なくとも差別には屈していません。誰か一人でも差別に屈していたら、僕はここにいません。だから、感謝でしかないんです。

今朝、4時に起きて50分筋トレをして畠に行って。なんか、ここ3~4年ですかね。社会の中がドロドロしていて、はがいいことがいっぱいあって、…考え出したらきりがないんですが、やっぱりイキイキキラ輝いて生きていきたい。それにつくるんです。差別とかに囲まれて暮らしているのが人生ですよね。そういうドロドロとしたものに左右されるのが人生かもわからん。

私にはわからんけど、やっぱり、一人一人の生き方、一人一人が平和でかけがえのない存在である社会であってほしいと強く願いますし、差別やいじめが起こらんような…。長いな。言いたかったことは、僕の住んでいるK町、徳島市、鳴門市…、徳島で、私にとっては部落差別というのは自分が本気で考えるべきことの一つなんだけど、もし、部落差別でちょっとでもしんどい思いをしたり、悩んだりしてしまう子がいるんだったら…。私の娘もそうです。

ニコニコして今日私と一緒にに行けへんと言うんですけど、しんどい思いを1ミリでもしているのなら、これは、私は、上手に言えないんですけど、そういうことはあってはならないんです。自分の可能性や一人一人の可能性を追求できる学びのできる社会であってほしいと、今日思いました。時間いただきありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター M》

彼を、中学1年の時に担任をしたんです。家庭訪問の時に部落問題を話したんです。私の家庭訪問が終わった時にお母さんが彼に言うわけです。「T、部落だと知つたんか」と。「知つたよ」そんな会話をありました。

お母さんは、部落外の人で大きな鳴門金時農家の1人娘です。大変な差別を乗り越えて結婚していくわけだけど、そのお母さんの故郷の鳴門金時農家を彼は継ぐわけです。感謝の中で農業をし続けている。

「T-over人権研究所」のホームページに入れているんですけど、毎年1月に農業体験をさせてもらっています。大根を収穫し、最後に餅つきをします。これは奥さんの実家でいろんな用意もしていただいて、本当に楽しいです。

(ニコニコ) 来年の1月もよろしいですか？

いろんな人が関わってくれたらと思います。本当に楽しいです。楽しいことはいっぱいあります。

そういう世界がどんどん広がっていきます。信頼関係ができ共感が生まれたら、本当に楽しいです。それにつながる学びを広げていきましょう。時間がもう少しです。いきましょうか。はい、どうぞ。

《滋賀県栗東市立R中学校教員》

(立ち上がり、どこを向いて話せばいいのか迷い、グルグル回っている。コーディネーターから声がかかり、大勢いる方を向いて笑顔で語り始める)Kと申します。私は、滋賀県の栗東市から来させていただきました。私が務めている栗東市での研修にM先生が来てくださったことが、今日ここに来るきっかけとなりました。その研修で、人権課題を「わがごと」とする教育について、たくさんのことM先生は語ってくださいました。

そのお話を聞いて、もっと深く聞いてみたいことや話してみたいことがたくさんあったのですが、手があげにくい雰囲気で聞けませんでした。最後に、M先生が「僕も今日、ここに遠いなか頑張って来た。今度は鳴門市のフォーラムがあるから誰か来てくれないかな」と(コーディネーターに思わず笑いがこぼれる)おっしゃってくださったので、そのとき話せなかったのもあって「あ、行こう」と思って来させてもらいました。

徳島県に来たのは、私が4歳の時以来です。母方の祖母の実家が香川県にあり、そこに顔を出すついでの形でしたが、お母さんに連れられ、船に乗り、渦潮を見たことを鮮明に覚えています。幼少期に一度訪れただけの場所に、自分の意志で学びに來ることになるとは思っていませんでした。これも一つのご縁というか、人とのつながりだなと思っています。

私は教員になって今年で4年目になります。少し仕事に慣れてきたとはいえ、まだまだわからないことがたくさんあり、勉強する毎日です。この4年間、一生懸命やってきたことに誇りはあっても、まだ自信はありません。そんな私ですが、うれしいことに人権・同和教育推進部の学年チーフをさせてもらっています。

私の学校では、3年間を通して、どの学年のどの時期に、この人権課題を軸に学んでいこうというのが決まっています。そして、その学年でやる人権学習の指導案は、そのチーフが原案をつくるという形になっています。だから、今のR中学校の2年生の子どもたちが学ぶ人権学習の指導案は、私がつくります。チーフの仕事は、今教えている子どもたちが1年生だった昨年

度から担当していて、昨年度は経験値のないまま、たくさんの人に協力していただいたり、自分で勉強したりと、情熱をもってつくりました。しかし、ふと思うのです。私がつくった人権学習は、子どもたちの学びになっているのか、反差別の生き方を目指そうとするものになっているのかと。

私は周りの人から、「気が強そう」とか「しっかりしてる」と思われるやすいのですが、そうではありません。失敗するのが怖い、臆病な人間です。だから、失敗しないようにできるだけの準備をして、堂々とふるまうことになっています。でも、心の中は心配なことだらけです。そんな私が、今年、2年生で部落差別問題学習します。私にとっては、教員としての長いキャリアのうちのたった1年、たったの1回かもしれません。「初めてなら失敗して当たり前、その失敗から学んで次頑張ろう。」と思えることなのかもしれないけれど、今の2年生の子どもたちにとっては、人生のうち1回あるかないかの大切な時間、部落差別との初めての出会いになるかもしれません。そう思つたら、重くとらえたいのです。

子どもたちのために、私に何ができるのか。やる気はあります。だから、いろんなところに行って学ぼうと思いました。研修にもできるだけ参加し、たくさん本を読みました。研修では、講師の方が「差別は人の思いで生まれたものだから、人の思いでなくせる。」とおっしゃっていました。確かにそうだと思います。それと同時に、人権学習が担うものの大ささを改めて感じます。

私は、差別をなくすために、自分と向き合うことが大切だと思っています。M先生や、他の発表者さんもおっしゃっていた、「わがこと」にするためにです。私は、これは、とても難しいことだと思っています。なぜなら、誰でも自分の嫌なところとか弱いところに目を向けたくないだろうと思うからです。

人をバカにする・見下すような感情は、私の中のどこにあるのか、どこから生まれるのかなんて、知りたくないだろうと思います。しかし、このやりたくないことをやらないと、差別はなくならないのではないかと思うのです。

現代社会に生きるほとんどの人が、「差別はいけないことだ。してはいけない、しないようにしよう。」と思っていると思います。私もそう思っています。それにしては傷つく人が多すぎると思うのです。誰の中にも差別につながる考え方や、差別心はあるのではないかでしょうか。「差別はいけないことだ。してはいけない、しないようにしよう。」と思っている人の中にもあるのではないかでしょうか。これを認めることは、とても力がいることで、頑張らないとできないことで、大切なことだと思います。

今、自分もやり始めたばかりの、「自分の弱さに向き合うこと」を軸にして、今の学年の子どもたちとは人権学習をしていくつもりです。不安もありますが、今日ここに来させていただいて、たくさんの人の思いに触れることができて、心がほぐれたのを感じます。人の出会い・つながりの温かさを再確認できました。子どもたちにも、こんな温かくて楽しい学びの場をつくりていきたいです。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター M》

ありがとうございました。結局、教師も中学生も、自分の言葉で自分を語るしかないんです。そこに関係ができたら、誰かをおとしめたりバカにしたりという空気が一変するわけです。妙な笑いが起らなくなっていくんです。本当に何とも言えない温かい空気が生まれていくんです。

そういうベースがなかつたら、人権問題というのは語っても綺麗ごとです。ただ、しているだけです。心に響かないんですから、本当にむなしです。結局自分なんです。さつき語ってくれた鳴門金時の彼は、やっぱり「峠」(作:真壁 仁)です。出会いは「峠」です。「峠」という詩に寄せて自分のことをさらけ出して語った。教室の中での、自分を語るというやり取りです。自分を出すということです。そういう関係性です。

「意見はありませんか？」と指名したら、「考え中です」。「考え中です」。サラッとそんなことを言う、話もしないような研究授業を観たことがあります。そんな中でしんどいことは絶対に言えません。先生も言えません。本当に自分の気持ちが言える。この場だから言える。この子らだから言える。この教室だから言えるという関係をつくるんです。

いくら立派な指導案を書いても、その関係がなかつたら、何にも残りません。だから、語りが広がっていかないんです。この関係はどうして生まれているかという、まさに「信頼」と「尊敬」の絆の中で、T君はずつとつくり続けてきたし、本当に一人一人の語りが生まれていくわけです。結局自分なんです。人のせいにしないことです。

結局、自分に何が問われているかということを問うていく。自分が本当にイキイキすることです。自分にその喜びがあるかどうか

かです。語れる喜び。人とつながれる喜びです。そういう関係の中で何かが生まれていくんだと思います。

私は、教員生活を44年間やってきました。夢のような44年間です。今4年ですか。羨ましいな。(会場に温かな笑いがこぼれる)本当に後10年教員をしたいな、そんな気持ちになります。もう時間がないのであと1人か2人。はい、どうぞ。

《1986年度A中学校卒業生》

ここにちは。この中に知っている先生もいらっしゃったりするんですけど、私は、中学3年の時にA中学校でM先生に担任していただいた、その時の生徒です。先生の歳からいうと私の歳は大体わかると思うんですけど、54歳になりました。

今日は仕事として来させていただいております。プライベートでも、先生のお誘いでここに来させていただいたことは何度あります。こんなに心が震えたのは初めてです。今にも泣きそうで、伝えたいことはいっぱいあるんですけど、もう、心が震えました。(Hさんの方を向きながら)いっぱい話をしてくれた方、ありがとうございました。54年間生きていると、辛いことや迷うこと、いっぱいありますよね。家庭の中。仕事の中。あると思います。

私は今、障がい者支援センターにいます。この会も語りがとても大事だということを学んだんですが、思いがあつても言葉が発せない方たちと日々過ごしています。そのような仕事をして約10年が経ちました。

3人の子どもを育てる中で、仕事をしていました。なぜ、手を挙げる勇気が出たかと言いますと、3人の子どもが順番に自立して行つたんですが、最後の子どもが、日本と外国を行つたり来たりしている子がいて、その子が、オーストラリアに行くといって旅立ちました。この春のことです。

この子が凄く苦手意識を抱えている子どもでもあって、お兄ちゃんと弟がいるんですが、振り返った時に、主人と2人になって向き合うことが増えました。この中で結婚されている方でしたらわかると思うんですが、夫婦でずっと心を通わせていることは非常に難しいことだと思うんです。それが簡単にできる方がいらっしゃるとは思うんですが、私はすごい問題を抱えていました。

主人が、頭で思っていることと、心で思うこと、それと行動に起こすことが全然バラバラになってしまいます。それが、姪っ子から、夜、私に相談に入っていたんですが、「アダルトチルドレン」。親の愛情がもらえなかつた子が陥る症状。それを私は姪っ子から相談されました。その内容を聞いていくと、うちの主人がそれだなということに気づきました。とっても苦しい結婚生活でした。楽しいことももちろんいっぱいあったんですが、心が通わないことが本当に苦しかったんです。

でも、主人が、心の中にある、自分の一番辛いこと、自分の一番言いにくいことを、つい先日のことですぐ伝えてくれたんです。だから、今日ここに来たことも、絶対何かに導かれてきたと思うし、今日家に帰つたら、主人といっぱい話をしたいなと思うこともあるんですけど、一番触れられたくない、一番話しにくいことを人に話すことがどれだけ勇気がいることか。どれだけ先程のように声が震えるものなのか。

主人がそれを伝えてくれたことを私は感謝しました。主人にいっぱい感謝しました。私も主人に伝えたいことをいっぱい話しました。小さな私の家庭の出来事を聞いてもらつただけなんですが、けれど、この私たちが話し合つた姿というのは、きっと子どもが見てくれていると思います。

私が感じたこの幸福感というのは、職場でも連鎖させていければいいのかなと思うし、心に思っていることが言葉にできない人、行動にできない人と、もっともっと寄り添つていけるような、言葉も大事なんですが、言葉にできない人、行動にできない人。その人たちが抱える問題に寄り添つていけるような人でありたいし、また、職場でこの場で話したような仕事ができたらしいなど心から思いました。

本当にこのような会に参加させていただけて、心から感謝しています。ありがとうございました。(深く頭を下げる)(拍手)

【後半3へ続く】